

# ‘How to work better’

ライオン・ガンダーが賞賛するフィッシュリ & ヴァイスの10箇条  
《How To Work Better》(1991)

1 一つの事をひとつで解決する (一つの事を丁寧に知る)

2 問題を知る

3 聞く事を学ぶ

4 質問する事を学ぶ

5 戯言から意味を理解する

6 変化を受け入れる、それは必然だから

7 ミスを受け入れる

8 シンプルに話す

9 落ち着いて

10 笑顔を忘れない

私のスタジオの壁にテープでとめられているのは、《How To Work Better》と題したフィッシュリ & ヴァイスによる短い10箇条のA4コピーです。誰が壁に貼付けたかは知りませんが、3年くらい前からあります。この作品はモチベーションに満ちた声明を使ったからかい半分の作品で、あるファウンドテキストを拡大しパブリック・コミッションの一部としてビルの外壁にそのとおりにペンキで描いたものです。私は時々学生へのレクチャーのはじめにこのスライドを見せたり、スタジオに来るアシスタントにはいつも見せています。

私がこの作品を気に入っている理由は、作品の「制作」そのものよりも(思想、コンセプト、リサーチ、素材への取り組みを含めた)活動の「実践」が重要であることを彼らがいかに意識していたかを教えてくれるからです。このことは私が敬愛してやまない彼らの制作活動の一面を間接的に示しています。・・・スタジオを離れられない制作上のアクシデントに見舞われ躓きながらも、ときには上出来な作品を作りつづけるのは簡単な事です。しかしよい活動の実践を生み出すことが難しい。それは上出来な作品をつくるという意味ではなくて、作品制作を可能にする諸所の条件を形作っていくということなのです。私が興味を持っていることについて話すようにと求められましたが、彼らのアプローチが自己目的な作品として解釈されうるということがあまりにも明らかな時、その一部だけをみていうのは間違っているように思います。

“Fischli/Weissの実践は、ひとつの驚くべき軌跡、一筋の道なのです。それは、狂ったように曲がりながらもコントロールを失わず、思慮深い素早く、勇敢でありながら小さな秘密にあふれている。観客はこの通り道を簡単に目で追うことはできないし、一つがどのように次の作品に到達するか理解できるとは限らない。彼らのアイデアがどのように発展したかについては作家本人の知識があって意味をなすもので、私たちにとってはそのギャップが大きすぎ、それぞれの作品との出会いが新たな啓示に見える。彼らの実践の多様性とその結果を説明するとすれば、私は《Kitty》(2001年)、《Untitled – Two Identical Groups》(1996年)などを例に挙げます。彼らは自分が理解する条件で思うがままに前進する。私にも彼らのように、背後の美術史以外のなものにも目をくれず目の前のアイデアに着手する能力があれば！わたしはこの二人のファンなのです。



Peter Fischli and David Weiss,  
Busi (Kitty), 2001, color video, 1 minute.  
Installation view, Times Square, New York.

スタジオの壁に貼ってある宣言のことについて戻ります。私は毎日それを読みますが、このコピー用紙が彼らの作品である事を度々忘れてしまいます。フィッシュリ & ヴァイスという二人の名前を冠する何か、という存在をすでに超えていて、世界に存在する無数の驚くべき事物の一つに舞い戻ってしまったようです。同じように私は二人のファンですが、彼らの作品を他の作家のものと思ってしまうことがよくあります。彼らが決まりきったスタイルをもたず多様な目的があったことが彼らのアートをわかりにくくするのは一キューレーターを引っ掛ける地雷であり、爆発寸前の手榴弾のように。それがわたしを微笑ませる。自分の手中にしたと思った時には、もう彼らは別の挑戦のためにどこか新しい場所へ行ってしまうからです。